

Movie Review 73 #スティング

『#スティング (The Sting)』(ジョージ・ロイ・ヒル監督、1973年) をNHK BSで視聴した。

1936年のシカゴを舞台に詐欺で日銭を稼ぐ1人の若者が、親同然の師匠を殺害したギャングに復讐するために伝説的な賭博師と協力し、得意のイカサマで相手組織を徐々に追い詰めていく様を描いた映画である。アカデミー賞作品賞を受賞。原題のStingとは、「騙す、法外な代金を請求する、ぼったくる」という俗語だそうだ。

事の始まりは、若き詐欺師Fが、師匠Lと共に通行人から金を騙し取るが、そのカネの持ち主が冷酷な大物ギャングだった。怒ったギャングはLを殺害する。

それに対して復讐を誓ったFは、Lの旧友である伝説の賭博師Gに協力を依頼する。Gは仲間を集め、ギャングを破産させるため、競馬の電送中継を遅らせて不正な馬券を買わせるという「一世一代の大イカサマ」を仕掛ける計画を立てる。

その間に、事態は二転三転する。ギャングの指示でFは「サリーノ」という謎の暗殺者に狙われる。計画はFBIや悪徳警官の妨害に遭いながらも進行するが、実はすべてがGの周到な筋書きであり、観客も登場人物も「騙される」結末が待っている。

本作は映画史的にも文句なしの名作として位置づけられている。

- ・観客を“気持ちよく騙す”構造が絶賛されている。
- ・レッドフォードとニューマン二人の軽妙な掛け合いと存在感は今見ても圧倒的。
- ・スコット・ジョプリンのラグタイム(特に「The Entertainer」)は映画を象徴する名曲として語り継がれている。
- ・1930年代のシカゴの雰囲気、衣装、美術がアカデミー賞受賞レベルで再現されている。

本作の中でが一番驚いたのは、Fの殺害の指令を受けた「最強の殺し屋」の存在を知ったときだ(まだ見ていない人は、以下の記述は視聴後に読んで欲しい)。

・映画はずつと「男たちの騙し合い」の世界を描いているので、観客は自然と“危険人物も男だろう”と無意識に思い込む（好意を寄せていた女性だったのだ）。そこを逆手に取って、日常的で無害そうな女性を配置することで、視界の外から刺してくる（sting）。

Fは詐欺師としては優秀でも、女性への警戒心が薄い、情に流されやすいという弱点を有している。暗殺者が女性であることで、Fの脆さが物語上のリスクとして可視化される。

本作はコンゲーム映画だが、あの暗殺者の捻りはサスペンス映画の文法を一瞬だけ持ち込み、驚きの強度をさらに高めている。

名作は何度見ても面白い。

評価：★★★★★